

## 百人一首のハンガリー語訳

### A Hungarian Translation of *Hyakunin Isshu*

Karolyi Orsolya

カーロイ・オルショヤ

#### 要 旨

本論は、ハンガリーにおける百人一首の翻訳の歴史を論じたものである。和歌は俳句に較べてハンガリーにおける認知度は低いですが、それでも20世紀初頭には、日本文学の紹介の中で文学史的な知識としていくつかの和歌がハンガリー語に訳されていた。百人一首の全訳はようやく21世紀に入って登場する。それとは別にハンガリー語訳の特徴は、日本語からの直接訳ではなく、英語やドイツ語に訳されたものを利用しての間接訳（中間言語訳）だということである。最近になって大阪大学の学生による直接訳が行われたが、日本人によるハンガリー語訳であること、また日本人であっても古典としての百人一首に詳しくない学生の訳ということで、まだ問題が残っている。以上のような翻訳の歴史を踏まえて、理想的な百人一首のハンガリー語訳について試案を示してみた。

キーワード：百人一首、ハンガリー語訳、掛詞・異文化

百人一首の国際化に向けて（序にかえて）

かつてニコラス・ティール本学名誉教授と英訳百人一首の共同研究を行ったことがある。それは百人一首が予想以上に何度も英訳されていることを知ったからである。今回はハンガリーから来た研究生（カーロイ・オルショヤ）に、ハンガリーにおける百人一首の翻訳の歴史をまとめてもらったが、そこで面白い現象に出会った。

英訳の場合は日本語から英語への直接訳だったが、ハンガリー語となると英語やドイツ語の翻訳を利用した間接的な訳であることがわかったからである。彼女はそれを「中間言語」として論じている。そういった視点からの百人一首研究は、これまで行われていないようなので、本論を今後の百人一首の国際化に向けての第一歩と位置付

けたい。

彼女は、近いうちに百人一首を日本語から直接ハンガリー語に訳してくれるはずである。百人一首も国際化が始まっていることを感じる。(吉海直人)

### はじめに

ハンガリー人が「日本の詩歌」について聞かれれば、おそらく最初に思い浮かぶのは「俳句」である。他のジャンルを知らなくても、「俳句」という言葉をハンガリー人は皆耳にしたことくらいある。それほどハンガリーにおいても「俳句」は有名である。しかしそれ以外の日本の豊かな韻文の世界は、まだ広く知られていない。

一般的にはそうであっても、ハンガリーの歌人・詩人は、昔からアジアに、そして日本の韻文に興味があった。そのため俳句や歌の翻訳は、既に20世紀の初めから行われている。ただし当時の詩歌の翻訳者は、当然のことながらドイツ語や英語などの翻訳本を基にして、日本の歌を間接的に訳していた。その場合、中間言語には翻訳者の解釈が含まれるし、形式の変更もある。ハンガリー語訳は、その変更された訳を基にしていることにより、オリジナルとの内容のずれがしばしば認められる。

それとは別に、日本では誰でも知っている百人一首の中のいくつかの和歌は、文学史的な紹介の中でハンガリー語に訳されている。それが百人一首の完全訳となると、21世紀まで存在しなかった。最近になってようやく完訳の試みが行われたばかりである。

本論では、現在までのハンガリーにおける百人一首享受の歴史をまとめる中で、歌翻訳の際に生じる様々な問題点をあげ、その中からいくつか取り上げて詳しく考察した。その上で今後の百人一首に関する展望も提案してみたい。

### 1、現在までの百人一首ハンガリー語訳史

ハンガリーにおいて、日本の歌の翻訳は20世紀の初頭から行われている。初めて本の形になって出版された歌の翻訳は、1906年の Barátosi Balogh Benedek 氏の日本文学史研究書に載っている翻訳であった。彼は様々なジャンルの文学作品を訳している。その中に百人一首からの直接引用かどうかは別にして、百人一首にも選ばれている和歌が4つ(3番目、4番目、58番目、77番目)載っている。その後もしばらく百人一首全体の翻訳は見られなかったが、1920年に Bardócz Árpád 氏が、1923年には

Kosztolányi Dezső 氏が、そして 1924 年に Barna János 氏がそれぞれ翻訳した歌の中には、百人一首の和歌が含まれている。

3 人に共通する問題点として、書き換えの書式が一致していないこと、詠まれた時代の解説が正しくない、或いは記載されていないことがあげられる。それは当時、ハンガリーでは日本のことが広く知られておらず、また決められたローマ字書き換え方法もなかったからであろう。そもそも彼らが使用していた中間言語による翻訳本の情報が間違っていたことも大きい。中間言語の問題といえば、日本の最大の物語である『源氏物語』は 1963 年、そして 2009 年、2 回も翻訳された<sup>1</sup>が、両方とも日本語からではなく、英語から訳されている。その中にも『源氏物語』に引用されている、そして百人一首にも選ばれている和歌の翻訳が載っている。当然それも日本語からではなく、英語から訳されている。

まず Bardócz Árpád 氏が書いた本の前書きを見ると、Hans Bethge と Paul Enderling のドイツ語訳を基に翻訳したことが述べられている。さらに翻訳を作る際、歌の意味を伝えることよりも、芸術的価値がある作品を作ることに重きを置いたと書かれており、翻訳というより創作に近いと言える。従って、ドイツ語訳の内容との相違はもちろんのこと、オリジナルの日本語の和歌と内容的な差が大きいことがわかる。

なお Bardócz Árpád 氏は、全部の歌にタイトルを付けている。歌人の名前も付けてあるが、不十分な場合やローマ字の綴りが間違っている場合もある。例えば、Shikibu と作者が書いてある歌が 2 つあるが、それだけでは紫式部なのか和泉式部なのかわからない。また翻訳内容の差がかなりあるため、オリジナルの和歌を知っていても、どの和歌の訳か識別することが難しいものもある。

Bardócz 氏が翻訳した歌の中で、間違いなく百人一首の歌であるものが 8 つ認められる。それは柿本人麻呂 (3)、安倍仲麿 (7)、小野小町 (9)、源宗于 (28)、壬生忠岑 (30)、藤原敦忠 (43)、和泉式部 (56)、そして藤原俊成 (83) である。

確実に百人一首の訳であっても、内容、場所や雰囲気の違いなどが見られる。例えば柿本人麻呂の「あしびき<sup>2</sup>の山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかもねむ」という歌は次のようにハンガリー語訳されている。

*Aranyfácán rikolt a fák alatt ;  
az ablakon beleng a rét szaga.*

*Magam vagyok : hiába vártalak-  
be lassan múlik most az éjszaka!*

この歌を日本語に直訳してみよう。「木の下でキンケイが鳴く。窓から野原の匂いが漂ってくる。私は独りである。あなたを無駄に待っていた。今夜がなかなか終わらない。」ここで「窓」と「匂い」に注目してみよう。平安時代の邸（寝殿造）には窓がない。ハンガリー語訳には「窓」が書いてあるため、場面は平安時代の日本ではなくなる。ハンガリーの家は窓があり、むしろ、ここで描いているのはハンガリーの田舎の風景である。

また、オリジナル歌には「匂い」という、嗅覚的なものが出てこない。このような違い、また言葉使いの違いのため、日本らしさが失われている場合も少なくない。それに「山鳥」は日本固有の鳥であり、オスとメスが夜離れて寝ることから、一人で過ごす夜の寂しさを表すために恋歌でよく使われている。ハンガリー語の「キンケイ」はそのようなイメージを持ってない。そのため解説を書かずに翻訳のみで「キンケイ」という言葉が書かれている場合、ハンガリー人の読者がそれを理解することは難しい。もちろんそれは現代日本人から見ても、必ずしも常識ではないため、日本でも語釈が付けられるのが普通である。

もう1つの適例が、藤原俊成の「世の中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿ぞなくなる」のハンガリー語訳である。

Ha emberek házába jártam,  
mindig csak bánatot találtam.  
Hogy fájdalmuk ne érjen engem,  
egy messzi rengetegbe mentem.  
De jaj, az élet ott sem éden :  
könnyet láttam egy rén szemében!

この歌の直訳は次のようになる。「人の家に行ったら、どこでも悲しみしか見つけられなかった。人の悲しみから逃げるために、遠い森に行った。でも、人生はあそこでも「エデンの園」じゃなかった。トナカイの目に涙をみた。」

この歌では、「鹿」が「rén」として訳されているが、「rén」は鹿ではなく、トナカイにあたる。トナカイは北の、寒いところに住んでいる動物というイメージである。ハンガリーで鹿は日本のように身近な存在ではないが、森の近くの野原などに今でもよく見られる。それにもかかわらず、ここではハンガリーにいないトナカイが使われている。またもう一つの大きな違いが、視覚と聴覚である。元々の歌では鹿が鳴いているので、鹿の存在が聴覚的にとらえられているが、ハンガリー語訳ではトナカイの目に涙を見るので、視覚的な存在となっている。ただし、ここには「鳴く」を「泣く」として翻訳してしまった翻訳ミスがある可能性が大きい。このような違いのため、ハンガリー語訳の雰囲気が元々の歌と大きくずれている。

次に Barna János 氏の翻訳には、歌人の名前と大体の生きていた時代が書かれている。ただし書き換えの不統一や、時代の誤りなどが認められる。例えば、1139年に生まれた藤原実定のところに、8世紀と書かれている。Barna János 氏の翻訳で、確実な百人一首のハンガリー語訳は全部で9首ある。それは小野小町(9)、光孝天皇(15)、元良親王(20)、紀友則(33)平兼盛(40)、和泉式部(56)、待賢門院堀河(80)、藤原実定(81)と藤原定家(97)である。

藤原定家訳のところに作者不明と書いてあるが、翻訳の内容から推測しておそらく定家の歌である。また翻訳に関して、内容や雰囲気の差が認められるものもある。例えば元良親王の「わびぬれば今はた同じ難波なる身をつくしても逢はむとぞ思ふ」という歌は次のように訳されている。

*Olyan vagyok mint a bója,  
Mely ott ring a habok felett ;  
Hányja-veti, ostromolja  
Kétékedés, gond a szívemet.*

*Egy gondolat bántja folyvást,  
Egy gondolat gyötri, tépi :  
Mikor látjuk újra egymást,  
Mikor látjuk újra még mi?*

この歌を日本語に訳すと、次のようになる。「私は海に浮かんでいるブイみたい。心が心配や悩みで揺れている。私の心を悩ませる1つのことは、いつあなたとまた会えるのかな～ってことだけ。」

この翻訳は内容の差が極めて大きい。オリジナルには「逢はむ」と書かれているが、この「む」は「～しよう」という意味を持っている。つまり、作者は積極的に「逢おう」と述べていることになる。ところが、ハンガリー語訳では、訳者は自分(作者)をブイ(みをつくしをブイとして訳す)にたとえている。そのブイが水の上に浮かんで、波に流される。波に流されるブイと同じように、自分の心が「いつあの人とまた会えるだろうか。もう二度と会えないかもしれない」と迷っていることを表現している。もともと、「みをつくし」は、船の道しるべであり、水に流されないようになっている。このため、原作と意味が大きく異なっているのである。

3番目の Kosztolányi Dezső 氏が1923年から新聞や本に日本歌の翻訳を載せていた。計203首を翻訳し、その中で22首は百人一首に選ばれている歌である。彼自身も優秀な歌人であり、翻訳活動も高く評価されている。たとえば世界中有名なエドガー・アラン・ポーの作品「大鴉」を初めてハンガリー語に訳したのも Kosztolányi 氏である。

Kosztolányi 氏訳の出典はドイツ語の翻訳、-Paul Enderling、Hans Bethge、Paul Adler、Wilhelm Gundert、英語の翻訳、-William George Aston、Arthur Waley Basil、Hall Chamberlain、Curtis Hidden Page とフランス語の翻訳、-Michel Revon-であった<sup>3</sup>。中間言語の存在と自分の翻訳に関する信条のために、形式と内容のずれが生じている。

自らが作った作品と同じく、翻訳も素晴らしいのだが、同年代の歌人や批評家からは、それは翻訳ではなく、新しく自身の作品を作ったと批評された<sup>4</sup>。日本の歌に対して「オリジナルが存在せず、全部は Kosztolányi Dezső 氏の自作である」とまで批判されたが、後の研究で日本詩は全部オリジナルが存在していると指摘された。本人も自分の翻訳をただの翻訳やコピーではなく、自分の作品として捉えている。そのため彼の目的は、言葉通り内容を伝えることではなく、素晴らしい作品を再生産することにあった。

彼が翻訳した歌の中には百人一首の22首の和歌が含まれている。それは柿本人麻呂(3)、猿丸大夫(5)、安倍仲麻呂(7)、参議篁(11)、僧正遍昭(12)、清原深養父

(36)、平兼盛 (40)、右大将道綱の母 (53)、藤原公任 (55)、大弐三位 (58)、良暹法師 (70)、祐子内親王家紀伊 (72)、崇徳院 (77) 藤原顕輔 (79)、待賢門院堀河 (80)、道因法師 (82)、藤原俊成 (83)、藤原清輔 (84)、西行法師 (86)、藤原良経 (91)、二条院讃岐 (92)、入道前太政大臣 (96) である<sup>5</sup>。Kosztolányi 訳の内容が最も顕著にずれていることを示す例は、84 番藤原清輔の「ながらへばまたこのごろやしのばれむ憂しと見し世ぞ今は恋しき」である。Kosztolányi は次のようにハンガリー語に訳している。

*Ha még elélek holnapig,  
beh szép lesz ez a mai nap,  
beh víg,  
hiszen ma is már drága kincs  
a tegnapom, mi nincs.*

ここでは元々の意味と違って、「人の命はいつ終わってもおかしくないので、明日まで生きることができれば、また1つの日を生き抜いたと喜べる。なぜならば、生き抜いた昨日も、生き抜けたからこそ、今日になって大切にしている。」と訳しているため、オリジナルとはかなり異なっていることがわかる。

## 2、百人一首全体の翻訳

### ①Szántai Zsolt 氏の翻訳

初めてハンガリーで出版された百人一首の完訳本は、2001年の Szántai Zsolt 氏の訳である。Szántai 氏の *Haikuk és Wakák* (俳句と和歌) では、1000の俳句と短歌の訳が載っている。この本には歌だけではなく、「前書き」には日本歌のジャンルの説明と日本詩歌史の概要も書かれている。また Bardócz, Baráth や Kosztolányi と同じく、歌にはタイトルも付いている。

Szántai Zsolt 氏の本には、日本語から直接訳したのか、間接翻訳なのかの情報は書かれていない。タイトルはハンガリー語に翻訳せずに、そのまま書いているが、その書き換えには問題がある。彼は *Hjakunin Iszu* と書いているが、ヘボン式ローマ字の書き換えの場合「*Hyakunin Isshu*」、ハンガリー語式書き換えの場合「*Hjakunin Issu*」

となる。「Iszu」という書き換えは、ハンガリーの書き換えには「椅子」という日本語の言葉を表す。こういった書き換えの問題は本全体に渡っており、主にヘボン式ローマ字とハンガリー語の書き換えが混在している。また歌の意味がずれていることもあるが、それは次の「百人一首の問題点」で詳しく分析する。

## ②大阪大学ハンガリー語専攻学生の百人一首翻訳

大阪大学外国語学部ハンガリー語専攻では、毎年、学生の手によって1冊の本がハンガリー語で出版されている。2014年には、百人一首のハンガリー語訳がテーマとなった。100首を14人で分担し、オリジナルの歌を日本語からハンガリー語に訳している。歌にタイトルは付けず、全部の歌に解説が付いており、本の最後にかかるた遊びの説明、日本人から見た自然、貴族の一日なども書いてある。書き換えはハンガリー語に統一しており、ハンガリー語訳の中では直接訳ということでオリジナルに一番近いと言える。

ただし、ハンガリー語訳と解釈の文章がわかりやすく書かれているにもかかわらず、ハンガリー語の文法的な問題が生じ、また歌の意味や解釈に意味のずれがある場合もある。例えば、藤原基俊(75)名前表記を「もとよし」と誤表記しており、解釈でも内容の間違いが生じる。基俊の歌は息子を維摩会の講師に選ぶと約束したが、約束を破った藤原忠通への文句の歌であるが、解釈には基俊自身が選ばれなかったと書いている。また、歌は分かりやすい言葉遣いになっているものの、かえって文学作品としては認めがたいものもある。

翻訳する際には、対象言語のネイティブスピーカーが翻訳する方がふさわしいかもしれない。ただしネイティブスピーカーであっても、翻訳のもとになる作品で見逃すポイントが出てくる恐れがある。そのため日本語で書かれている文学作品をハンガリー語に訳す際、両方のネイティブスピーカーの協力が一番望ましい。

## 3、百人一首翻訳の問題点

Nicholas J. Teele は、百人一首をどう理解するかに関して、3つの問題点があると「英訳百人一首の世界」という論文で述べている。ハンガリー語翻訳に関しても、この3点の通りに考えてみよう。

1) 解釈の問題 (注釈が多くあるが、それは必ずしも一致しない。その中から翻訳者



が何を使用したかによって内容が変わってくる。)

- 2) 場所の把握の問題 (読者が内容に沿ってイメージするので、歌に詠まれている場所を取り違えると、訳は台無しになる)
- 3) 英訳する時の問題 (このなかには「文化的問題—日本の文化にはあるが、英米、そしてハンガリーの文化にはないもの」、「言語的問題」と「場所の問題」がある))

この3つの問題点の中に様々な要素があるが、この中から2つについて詳しくみてみたい。それは (1) 日本文化、または日本にはあるが、ハンガリーの文化、またハンガリーにはないもの、そして (2) 掛詞の技法である。

日本、日本の文化にあるが、ハンガリー、ハンガリー文化にないものは、複数例があげられる。一番簡単な例の一つは、桜である。日本人にとって、桜は儂さの象徴であり、咲き始めたらすぐ散ってしまうものである。そのため歌に詠まれる場合、しばしば無常の気持ちを表している。だが、一般的なハンガリー人はこのような考え方を持っていないため、「桜」を見ても無常を感じることは必ずしもない。

百人一首にも、日本独特のものが複数あるが、今までの翻訳ではどのように対応したのだろうか。具体的な例として、前記にも出た柿本人麻呂の歌、「あしびきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかもねむ」の4つのハンガリー語訳を比較してみよう<sup>6</sup>。

Kosztolányi Dezső (1933)

Hosszú az éj-oly hosszú, mint a fácán  
ezüstös hosszú tolla,  
csak bódorog botolva  
annak, ki egyedül virraszt ágyán

Bardócz Árpád (1920)

Aranyfácán rikolt a fák alatt ;  
az ablakon beleng a rét szaga.  
Magam vagyok : hiába vártalak-  
be lassan múlik most az éjszaka!

Szántai Zsolt (2001)

Hegylakók útja  
mint lehajló ág,  
épp' olyan girbe-gurba-

「ハンガリー語専攻学生 A」(2014)

Mint a rézfácán  
Lelőgó pompás farka

ezen egy éjszakában  
egyedül hálnom. . . . muszáj?

Hosszú éjszaka  
Amit egyedül töltök  
Én a kedvesem nélkül

百人一首を翻訳する際によく生じる問題として、日本特有の動物や植物があげられる。柿本人麻呂の歌には「山鳥」が書かれている。前述したように、「山鳥」は日本固有の鳥であり、オスとメスが夜離れて寝ることから、一人で過ごす夜の寂しさを表すために歌でよく使われている。このようなことは必ずしも現代の日本人には知られていないかもしれない。当然、ハンガリー人も「キジ」からこういう情報は読み取れない。そのために、ハンガリー語訳を作る場合、翻訳だけではなく、解釈（注記）も必要となる。

上記の4つの訳のうち、Kosztolányi 氏、Bardócz 氏と学生 A 三人とも「キジ」という言葉を使っている。ただし解釈がないと、なぜ「キジ」という言葉が使われているのか、ハンガリー人が理解するのは難しい。学生 A の訳に解釈が付いているが、「キジ」に関しては尾の長さについての情報のみ書かれている。これでは異文化の壁は越えられない。

ここで展望の1例として、柿本人麻呂の歌の私訳を提示したい。

Rézfácán kakas  
Egyedül veti ágát  
Lelóg hosszú tolla  
Az éj is hosszú, ha egyedül  
Hajtom fejem álomra

この私訳を日本語に直訳してみよう。「キジの雌が一人でベッドを作る。長い尾がぶら下がっている。一人で寝ると、夜も長い。」元々、歌にはキジの雌が一人で寝るという情報が入っていなかった。Teele 氏によれば、現在までの数多い英訳では枕詞を訳すケースと無視するケースもあったが、訳すケースが多いようである<sup>7</sup>。ただし、ここでの「あしびきの」は意味が知られていない。そのために、適切な翻訳もできないので、翻訳しないと少しの余裕（スペース）ができるとのことである。その余裕を

使って、キジの情報を入れてみた。それだけでは済まず、解釈を入れる必要がある。その解釈に枕詞、序言葉、キジや作者について情報を入れるのが望ましい。

同音異義語はハンガリー語にも存在するが、日本語ほど数が多い。あったとしても、その歌の内容に該当するかどうか問題である。例えば「待つ」という動詞はハンガリー語で「vár」だが、「vár」という言葉には「お城」という意味もある。16番の在原行平の歌に「まつ」という言葉を使った掛詞があるが、むりやりハンガリー語訳に「vár」を入れようとしたら、場所と雰囲気が変わってしまう。

「ハンガリー語専攻学生 B」はつぎのように在原行平の歌、「立別れいなばの山の峰におふるまつとし聞かば今帰り来む」をハンガリー語訳している。

Elbúcsúzom most  
És Inabába megyek.  
De ha azt hallom,  
Hogy vártok engem, rögtön  
Visszajövök hozzátok

言葉の「待つ」とう意味だけ翻訳し、解説で掛詞として持つ2つの意味を説明している。一方、Szántai 氏はこのように訳している。

Elváltunk csendben,  
De ha az Inabáról,  
Magas oromról  
Hallom a fenyők szavát,  
Visszatérek, megyek hozzád.<sup>8</sup>

ここでは、「松が呼んでいるのを聞いたら、あなたのところへもどる」と訳してあるが、「待つ」という掛詞の意味は書かれていない。掛詞を訳す際には、無理やりハンガリー語で同音異義語を探して、ハンガリー語訳を入れるより、解説や注記を設け、そこで説明するのが一番適切ではないだろうか。

#### 4、展望提案

百人一首に限らず、現在まで日本の文学作品翻訳の中で、間接的に中間言語翻訳をもとにして訳されたものは多い。そこには問題が2つ生じる。1つは、中間言語翻訳の良し悪しである。その翻訳に間違いや誤解などあれば、それに翻訳者が気づかずに、そのまま訳してしまうというミスがハンガリー語訳にも繰り返される。もう1つは原文との距離である。翻訳をすると、翻訳することだけで原文との距離が当然発生する。そこに中間言語が入ると、原文と中間言語、中間言語とハンガリー語訳の間の距離が足されることによって、その距離はさらに遠くなる。これを防ぐために、やはり原文からの翻訳が望ましい。

日本とハンガリーは文化上での常識が違うため、それを考慮した訳し方をしないと、ハンガリー人に理解できない場合も少なくない。ただし、これは現代日本人にも通用する。平安時代に常識であったことが今は常識ではない、また古典日本語と現代日本語が極めて異なる。そのため、出版されている百人一首の本の殆どは解釈と現代語訳が付いている。翻訳の場合も、できる限り元々の意味を保ち、ハンガリー人読者に理解できにくい点を解釈で補足説明すべきであろう。そうすれば、訳によって日本韻文のもっと深い理解ができ、さらに注を見ることで歌の意味が分かるようになる。だが、これができるには、日本とハンガリーの文化に、そして百人一首にも深い知識を持つことが不可欠である。

形式については、歌の5・7・5・7・7という形式を守ったほうが望ましい。5・7・5・7・7になるからこそ、歌といえるからだ。形式を守らないと、訳した詩が歌ではなくなる。ただし、内容や形式が守られていても、よりレベルの高い文学的な訳が望まれる。それに加えて、和歌文学の特殊な技法や言語遊戯をどう訳すか、考慮する必要がある。枕詞と序詞の場合は、意味が知られている場合、それを訳すと原文により近い翻訳になる。ただし、前に出した「あしびき」の場合、意味が知られていないのだから訳しようがない。掛詞はさらに難しい。前にも述べたように、同音異義語はハンガリー語にも存在するが、日本語ほど数が多くない。しかも、ヨーロッパの文学においては、縁語や言葉遊びはユーモアのために使われている。そのため掛詞の技法がうまく翻訳できない。それをまた無理やり翻訳すると、ハンガリー人読者に理解されることは難しい。

## ま と め

ハンガリーでは、比較的昔から百人一首のハンガリー語訳作業が行われていたものの、20種類ほどある英語訳と比べると数が少ない。こういった百人一首の翻訳活動は、20世紀から21世紀にかけて、主に英語・フランス語・ドイツ語などの中間言語翻訳本から作られたという歴史がある。

この中間言語訳には問題がある。翻訳者自身がオリジナルの言葉を知らなくてもいいのだろうか。もしそうであれば、中間言語の存在により、オリジナルとのずれが大きくなる可能性が高い。ただし、これはもう一つの問題ともかかわる。翻訳の目的は、新しく自分の作品を作ることだろうか。それともオリジナルをハンガリー語に訳し、できるだけ内容も保護しながら、オリジナルの雰囲気を変えずに訳をつくることだろうか。

20世紀には、日本の歌の技法や形式に注目せず、ほぼ同様の内容で、芸術的な価値のある作品を作ることをめざして、百人一首が創作に使用されてきた。そのため、掛詞をどう訳せばいいかという問題について、じっくり考えられることはなかった。歌の形式を守り、意味もできるだけ近づけるようなハンガリー語訳は、21世紀まで存在しなかった。

新たな作品を作るのではなく、百人一首を翻訳し紹介する、つまり日本文化に触れる目的であれば、形式や技法などの問題もしっかり考え、解説も文法の説明も追加する必要がある。昔は常識であった事柄が、現代の日本人にも通じないのならば、当然まったく違う常識を持っているハンガリー人にも通じないからだ。

翻訳された歌を読む際には、翻訳者がどのような目的で、どのような観点から翻訳したのかを考慮する必要がある。また、自分自身が他言語に翻訳する際には、どのような目的で訳したいのかを明確にし、訳された歌に何らかの価値を持たせるよう心がけたい。

## 注

- 1 この2つの翻訳は *Gendzsi regénye* (Hamvas Béla 氏訳、Philipp Berta 氏改訂、Budapest, Európa Könyvkiadó 出版 1963年) と *Gendzsi szerelmei* (Gy. Horváth László 訳、Budapest, Európa Könyvkiadó 出版 2009年) である。
- 2 「山」に掛かる枕詞。もともと濁点なしで、「あしひき」の形で頻用された。

- 3 Kosztolányi Dezső の日本語訳の出典に関しては、1986年に Zágonyi Ervin 氏が研究結果を「Kosztolányi japán versfordításai-forrásaik fényében」という論文に研究結果を発表した。その後、Kolozsy-Kiss Eszter 氏が2010年の博士論文、「Kosztolányi Dezső japán versfordításai」において全詩の翻訳出典の徹底的な研究を行った。
- 4 死後、1942年に出版された「*Idegen költők*」の前書きで Illés Gyula 氏による批判を Kolozsy-Kiss Eszter 氏が2010年の博士論文に引用している。
- 5 ここまでの Bardócz 氏、Barna 氏と Kosztolányi 氏訳の順番も百人一首配列順通りである。
- 6 それぞれの歌の行ごとの日本語訳が次のようである。Kosztolányi 氏：夜が長い、その長さはキジの／シルバー色の長い羽のごとく／（その夜が）躓いて歩き回ったりするだけ／ベッドで一人で眠れずにいると。Szántai 氏：山人の道／ぶら下がっている枝／のように曲がっている／この一つの夜／一人で寝ないといけない？ Bardócz 氏：木の下でキンケイが鳴く／窓から野原の臭いが漂ってくる／私は一人である／あなたを無駄に待っていた／今夜がなかなか終わらない。学生 A：キジの／素晴らしいしだり尾／長い夜／（この長い夜を）一人で過ごす／恋人と離れて
- 7 多くの歌の場合はそうであろうとも、Teele 氏と吉海氏が1994年の「英訳百人一首の比較対照研究」でリストアップした柿本人麻呂の歌に12種の英訳の中で4種にしかこの枕詞が翻訳されていない。
- 8 それぞれの歌の行ごとの日本語訳は次のようである。学生 B：さようなら／いなばに行く／でも、耳にしたら／君たちが待っているのを、すぐ／君たちのところに帰る。Szántai 氏：静かに分かれた／が、いなばから／高い峰から／松の声を聞けば／戻る、君のところに行く

#### 参考文献

- ・Nicholas J. Teele (2005) 「英訳百人一首の世界」『百人一首万華鏡』(思文閣出版) 153-166 頁
- ・Nicholas J. Teele、吉海直人 (1994) 「英訳百人一首の比較対照研究」『総合文化研究所紀要 第11巻』210-218 頁

- ・ Bártos Balogh Benedek (1906), Dai Nippon III. Irodalom, Gárdonyi Samu könyv és műkereskedése 出版
- ・ 「Barna János, Japán antológia」 <http://terebess.hu/keletkultinfo/jantologia.html>、2015年3月18日アクセス
- ・ 「Bardócz Árpád, Japán versek」 <http://terebess.hu/keletkultinfo/bardocz.html>、2015年3月18日アクセス
- ・ 小林俊洋 (2009) 『百人一首で学ぶ文法』 (真珠書院)
- ・ Gendzsi szerelmei (2009) Gy. Horváth László 訳 Budapest, Európa Könyvkiadó 出版
- ・ Gendzsi regénye (1963) Hamvas Béla 氏 訳 Philipp Berta 氏 改訂 Budapest, Európa Könyvkiadó 出版
- ・ Kolozsy-Kiss Eszter (2008) Kosztolányi Dezső japán versfordításairól, *Literatura*, 34/1、37-68 頁 MTA 出版
- ・ 「Kolozsy-Kiss Eszter (2010) Kosztolányi Dezső japán versfordításai」 <http://doktori.btk.elte.hu/lit/kolozsykisseszter/diss.pdf>、2015年6月23日アクセス
- ・ 「Kosztolányi Dezső japán versfordításai」 <http://terebess.hu/keletkultinfo/kosztjapan.html>、2015年3月15日アクセス
- ・ 「Kosztolányi Dezső : Kínai és japán költők」 <http://mek.oszk.hu/06600/06689/06689.htm>、2015年3月15日アクセス
- ・ 「Ogura Hyakunin Isshu」 <http://jti.lib.virginia.edu/japanese/hyakunin/frames/hyaku-frames.html>、2015年3月26日アクセス
- ・ Szántai Zsolt (2001) Haikus és wakák, Budapest, Szukits Kiadó 出版
- ・ Százszorszép japán versek (2014) 大阪大学外国語学部ハンガリー語専攻
- ・ Zágoni Ervin (1986) Kosztolányi japán versfordításai-forrásaik fényében, *Itk* 1986/3, 246-274 頁 MTA 出版
- ・ 和歌史研究会編 (1973) 『私家集大成第1巻中古1』 (明治書院) 東京
- ・ 吉海直人監修 (2007) 『一冊でわかる百人一首』 (成美堂出版) 東京
- ・ 片桐洋一編 (1999) 『歌枕歌ことば辞典』 (笠間書院) 東京

